

歯科衛生士学校における客観的臨床能力試験 (OSCE) に対する学生の評価

松本 厚枝, 原 久美子, 森岡 志摩
竹本 俊伸, 赤川 安正

Evaluation of the OSCE at Dental Hygienists' School by the Students

Atsue Matsumoto, Kumiko Hara, Shima Morioka,
Toshinobu Takemoto and Yasumasa Akagawa

(平成16年3月12日受付)

緒 言

歯学教育では、平成17年度から実施予定の共用試験 (computer-based testing: CBT と objective structured clinical examination: OSCE) を前に、各大学で客観的臨床能力試験の試行が行われている。広島大学歯学部でも平成12年度に OSCE を導入し¹⁾、田口らは受験生の多くが OSCE は有意義であったと評価しており好意的に受け入れられていたと報告している²⁾。当校でも歯科衛生士教育において、基本的な知識、技術、態度を臨床実習開始までに身に付けておくことは必要であり、客観的な臨床能力評価を行うことは必要不可欠と考え、平成15年2月に歯科衛生士学校の前期臨床実習開始前 OSCE を開始した。今回、OSCE 終了直後と臨床実習開始1ヶ月後に OSCE の効果と課題の適否について検討するために受験生に質問紙調査を行った。

本稿では、平成15年前期臨床実習前 OSCE の概要と受験生の OSCE に対する評価について報告する。

対象および方法

1. OSCE の概要と方法

OSCE は広島大学歯学部附属病院の口腔総合診療部と歯科衛生室の協力のもとで実施した。

1) 対象

対象者は、広島大学歯学部附属歯科衛生士学校平成14年度生20名 (女性) とした。

2) 試験方法

表1に平成15年前期臨床実習開始前 OSCE の実施概要を示す。

表1 歯科衛生士 OSCE の概要

実施日	平成15年2月26日
試験会場	ステーション数 12 課題数 8 レスト数 4
試験時間配分	課題の読み取り 1分 課題の実施 5分 フィードバック 1分30秒 移動時間 30秒
評価者数	12名
模擬患者数	12名

試験実施日は、前期臨床実習 (3月開始) 開始前の平成15年2月末に OSCE を実施した。OSCE 前日に受験生に対して説明会と会場下見を行った。

試験会場は、広島大学歯学部附属病院の口腔総合診療室を中心として実施した。ステーション数は12ステーション設置し、そのうち8ステーションに課題を用意し、4ステーションはレストを設けた。受験生は2ステーションの試験を受けるとレストで休息ができるよう緊張緩和に配慮した。

時間配分は課題読み取り時間が1分、課題実施時間5分で、フィードバック1分30秒、移動時間30秒とした。

評価者は歯科衛生士8名と歯科医師4名で、歯科衛生士の評価者の中には外部評価者として他校の歯科衛

広島大学歯学部附属歯科衛生士学校 (校長: 赤川安正)
本論文の要旨は平成15年6月の第88回広島大学歯学会総会にて発表した。

表2 OSCEの課題内容

1	医療面接 初診患者の問診
2	保護者への育児不安への対応
3	口腔乾燥の患者対応「口腔リラクゼーションの指導」
4	感染対策「手指のもみ洗い」
5	セメント練和と共同動作
6	初めて義歯装置をする患者への対応
7	口腔細菌検査結果を患者に伝える
8	PMTCの方法を患者に説明する

生士学校の教員1名も含まれた。

模擬患者は歯学部の研究12名で行った。

課題内容は、臨床の場面を設定した内容とし当校専任教員により作成した。俣木らは³⁾ OSCEの課題内容は臨床実習と密接に関連したもので実際の臨床場面に近似した状況を設定することと述べているように、当校でも学生が臨床実習で行う場面を設定した。

各ステーションの課題内容について表2に示す。

2. 調査方法

調査対象は、OSCE受験生20名に対して行った。

質問紙調査の時期は、OSCE終了直後と、臨床実習での効果を確認するために臨床実習開始1ヶ月後の2回とした。

質問内容は、OSCE終了直後では、各ステーション毎の課題の適否について検討するため『課題の難易度や時間について』、『フィードバックの理解について』、『模擬患者のシナリオや話し方や態度について』の項目を4段階評価の記名式で記入させ、各ステーション毎の感想を自由記載させた。また、臨床実習開始1ヶ月後では、無記名で『臨床実習での効果』と、『今後の課題』などについて4段階並びに3段階の回答とした。

結果および考察

1. OSCE終了直後

OSCE終了直後の質問紙調査の結果を図1～3に示す。

1) 課題の難易度や時間について (図1)

『課題は、難易度や持ち時間から見て適切であったか』という問いに対して、全体的には、「適切」と回答したものが55%、「どちらかというと適切」が45%、「不適切」と回答したものはいなかった。ステーション毎の調査では、1ステーションと2ステーションで約半数が「どちらかというと不適切」または「不適切」と回答していたが、他のステーションは約7割以上が「適切」または「どちらかというと適切」と肯定的で

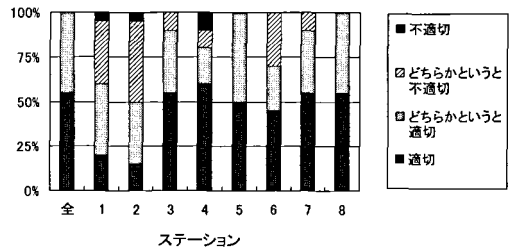


図1 課題の難易度や時間について

あった。1, 2ステーションの不適切の理由としては、「場面設定において自分がどこに座って良いのか戸惑った」や「時間が足りなかった」と記述していた。事前に会場下見は行っているが、臨床実習未経験のため、術者用の椅子とアシスタント用の椅子の選択で迷いを感じたものがおり、設定時に使用する椅子を明確にしておく必要を感じた。また、適切な課題精選のためには評価者間でブラッシュアップを十分に行っておくことが重要である。

2) フィードバックの理解について (図2)

『フィードバックの理解について』は、全体的には、65%が「良く理解できた」と回答しており、ステーション毎の調査でも95%もしくは全員が「良く理解できた」、「ある程度理解できた」と肯定的であった。フィードバックは気づきをより明確化し、再認識させるためにもOSCE直後に行う必要がある。また、田口ら⁴⁾が報告しているように評価者からの助言は学習意欲を向上させることに繋がり重要である。

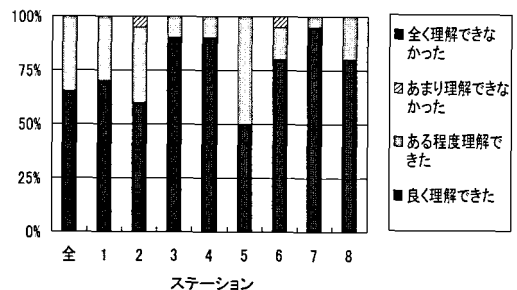


図2 フィードバックの理解について

3) 模擬患者のシナリオについて (図3)

『模擬患者のシナリオや話し方や態度について』は、全体的には65%のものが、「適切」と回答しており、各ステーションでは少しバラツキがあった。シナリオは試験の評価に影響するので、今後十分な検討が必要である。

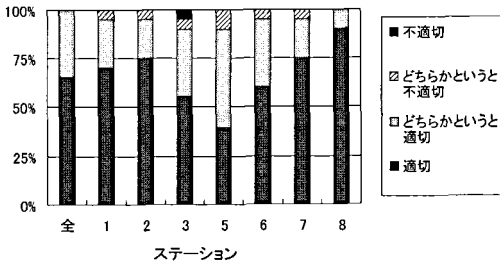


図3 模擬患者のシナリオや態度について

2. OSCE 終了1ヶ月後

OSCE 終了1ヶ月後の質問紙調査の結果を図4～7に示す。

1) OSCE の効果について (図4)

事前説明と会場下見を OSCE の前日に行ったが、この『事前説明について理解できたか』の問いに対して70%が「はい」と回答していた。また『会場下見は必要か』の問に対して95%が「はい」と回答しており、今後も初回の場合は、事前説明と会場下見は必要であるが、事前説明の対応としては、一年時に OSCE を見学させるか、または模擬患者として参加させることなどが考えられる。

試験時の不安と緊張については、『試験方法に戸惑いを感じた』と回答したものは80%で、『緊張した』は全員であった。『体調不良を心配した』ものは60%おり、自由記載のなかには、「精神的に疲れた」、「夢にまで出てきた」、「食欲が落ちた」などがあり、また「緊張して字が書けなかった」、「もう少しリラックスできるテストがよい」、「初めてなので患者対応は優しい内容がよい」などの意見があり、受験生は強い緊張度を示していた。田口ら⁵⁾が報告しているように、OSCE は受験生の心理面への影響にも配慮する必要があり、心理的緊張が成績に影響しないように緊張緩和に努める必要がある。また、緊張状態にある受験生を正しく評価

することは難しいので、今後、対応策を検討していきたい。

『フィードバックは有意義であったか』の問いでは「はい」と回答したものが95%おり、自由記載では「具体的でためになった」、「評価が聞いてよかった」、「アドバイスを直接聞いて良かった」と記述していた。「どちらでもない」と回答した5%のものは「ステーションによる」と回答しており、自由記載で「指摘されたが具体的なコメントがほしかった」と記述していた。

課題内容によっては、時間が短くフィードバックが十分にできなかったステーションもあり、今後フィードバックの時間を検討する必要がある。また、今回は評価者がフィードバックを行ったが、模擬患者が受けた安心感や信頼感などもフィードバックすると患者の受け取りも理解できると考えられる。このためには模擬患者の育成が必要である。

『OSCE は有意義であったか』は、85%が「はい」と回答しており、緊張しながらも OSCE を肯定的に受け止めていた。

『OSCE は臨床実習に役立つと思うか』という問いに対して85%が「はい」と回答しており、『臨床実習で役立っているか』の問いでは、55%が「はい」と回答していた。受験生は今回の OSCE で臨床の雰囲気を感じ取り、患者へのタイムリーな対応を目指すことで、臨床実習の充実に繋がったことと思われる。実際に臨床実習開始時の学生は環境や患者への対応に心理的に緊張し、これまで積み重ねてきた知識や技術を十分に発揮することができずに不安を抱えながら臨床実習に臨んでいるのが現状である。今回 OSCE を行ったことで臨床実習の緊張は多少緩和できたのではないかと推察する。しかし、OSCE を行って臨床実習前に自信喪失とならないように達成感が味わえることが重要であると考えられる。

『就職後に役立つと思うか』の問いに対しては、60%が「役立つ」と回答していた。今回の課題内容は当校の臨床実習である大学病院の状況設定としたため、多くが開業歯科医に勤務する学生にとっては就職後に役立つ内容とは思えなかったようである。

『機会があれば、再度 OSCE を受けたいか』の問いでは、「はい」と回答したものが25%、「どちらでもない」40%、「いいえ」35%と、否定的な反応を示した。今回の OSCE は受験生にとって緊張が強かったことが原因と考えられる。

『歯科衛生士教育に OSCE は必要か』という問いに対して95%が「必要」と回答しており、肯定的に受け止めていた。臨床実習前に患者対応のコミュニケーションスキルを身に付け、学生の倫理観の確立のため

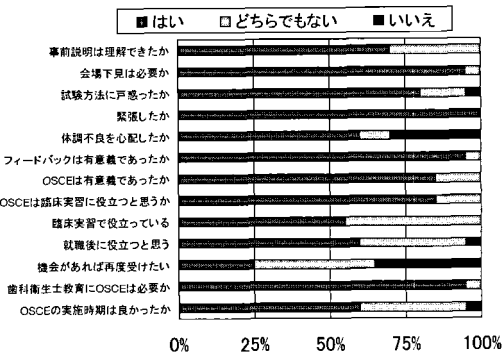


図4 OSCE の効果について

にも、また患者の安全性の確保のためにも必要と思われる。今後、当校でも継続していく予定である。

『実施時期について』は、今回の「臨床実習開始前で良かった」が60%で、自由記載では、「臨床実習前にやる気につながった」、「心構えができた」、また「多くのことを調べることができて勉強になった」、「臨床実習で活かして良かった」と肯定的な意見が寄せられた。今回の時期に否定的な意見である「いいえ」と回答した5%のものは「臨床実習前の緊張と、OSCEの緊張が重なったのでもう少し前が良い」と回答していた。臨床実習前に臨床能力評価法としてOSCEを行うことは効果的であり今後、時期を検討し導入する予定である。

2) 再度 OSCE を実施する時期について (図5)

『再度、OSCE を実施する時期について』は、「後期臨床実習開始前」60%、「前期臨床実習終了後」20%、「就職前」10%であった。越野ら⁶⁾はOSCEの評価は臨床実習開始に際しての重要な判断指標となると報告しているように当校でも臨床実習前に実施したことは有効であった。このことから当校では後期臨床実習開始前にもOSCEを行うように検討した。

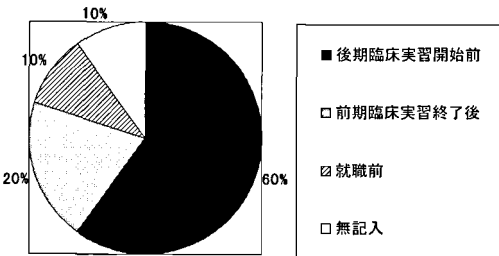


図5 再度 OSCE を実施する時期について

3) 評価者について (図6)

『評価者について』は、「顔見知りが良いか、顔見知りでない方が良いか」という問いに対しては「顔見知りの先生のみが良い」と回答したものはなかった。「顔見知りでない方が良い」が65%、「顔見知りと知らない先生の混在が良い」が25%であった。このことは、顔見知りの場合の方が安心して良いと思ったが、受験生は顔見知りでない評価者を望んでいた。今回のOSCEは顔見知りでない外部評価者並びに広島大学病院の歯科衛生士および歯科医師の評価者と、顔見知りである専任教官が評価者として参加したが、今後、顔見知りでない評価者を考えていく必要性を感じた。評価者においては、臨床実習が意欲的なものになるような効果的なフィードバックが行えるためにも十分な経験を有するものが必要である。当校では外部評価者や

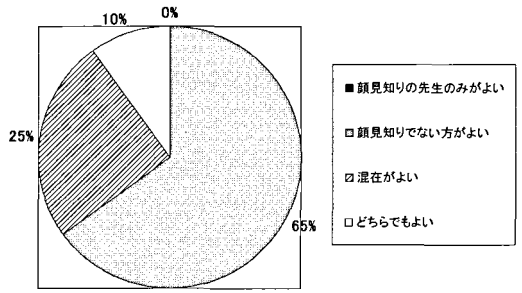


図6 評価者について

他校の歯科衛生士学校の教員に評価者としての参加を検討している。

4) 今後希望する内容について (図7)

『今後、希望する内容について』は「会話を重視した方が良い」55%で、「技術を重視した方が良い」と回答したものはなく、「どちらでも良い」が45%と、会話に対して好意的であった。学生や卒業直後の歯科衛生士は患者と良好な人間関係の構築や円滑なコミュニケーションを図るための対話技術は難しいが、歯科衛生士は、歯科医療に関する知識や技術の他に、人間性の面でもふさわしい資質を備える必要があり、OSCEによって評価することは重要である。また、このことは患者の心理や立場を理解できるコミュニケーション能力の高い歯科衛生士を育成することに繋がると考えられる。

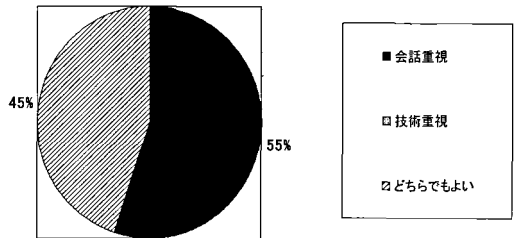


図7 今後希望する内容について

当校では、今回初めて歯科衛生士のOSCEを行ったが、全国の歯科衛生士学校でもOSCEの実施例は少なく実施報告もなく課題作成については手探りの状態であった。しかし今回、前期臨床実習前に行き、学生の学習意欲を喚起する観点からも有効であった。また、内容も臨床実習に役立つ内容であって、実際に役立てており、OSCEは臨床能力を評価する方法としては有用なものであった。

結 論

今回、歯科衛生士学生に前期臨床実習開始前 OSCE

を導入して受験生に OSCE に対しての評価について質問紙調査を行った結果、次の結論を得た。

① 受験生は臨床実習で活かすことができ有意義であったと評価しており、特にフィードバックは好意的に受け入れられていた。

② 不安や緊張を感じた受験生は多く、受験生の緊張緩和に配慮する必要があることが示唆された。

③ 受験生は歯科衛生士教育に OSCE の必要性を感じていた。

④ 時期は、前期・後期の臨床実習開始前を希望していた。

⑤ 評価者は顔見知りでない方が良いと回答したものが多く、検討する必要がある。

⑥ 今後、希望する内容については、技術よりもコミュニケーションを取り入れた会話重視を希望していた。

今後、質の高い歯科衛生士を育成するためには、歯科衛生士教育の中にも OSCE のシステムを構築していく必要がある。当校では今後、前期と後期の臨床実習開始前に位置づけていくことを考えている。

謝 辞

稿を終えるにあたり、外部評価者として参加していただいた広島歯科衛生士専門学校の専任教員の先生方に深謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 田口則宏, 小川哲次, 笹原妃佐子, 富士谷盛興, 谷 亮治, 伊藤良明, 田地 豪, 玉本光弘, 田中栄二, 石川隆義, 田口 明, 寶田 貫, 赤川安正: 総合歯科医療研修評価における OSCE の導入, 日歯教誌, 17, 386-394, 2002.
- 2) 田口則宏, 小川哲次, 笹原妃佐子, 富士谷盛興, 谷 亮治, 伊藤良明, 田地 豪, 玉本光弘, 田中栄二, 石川隆義, 田口 明, 寶田 貫, 赤川安正: OSCE 実施に対する卒後臨床研修医へのアンケート調査, 日歯教誌, 17, 106-112, 2002.
- 3) 俣木志明: 「モデル・コア・カリキュラムと共用試験」共用試験 OSCE について, 日歯教誌, 18, 57-63, 2002.
- 4) 田口則宏, 小川哲次, 赤川安正: 臨床研修におけるヘルスコミュニケーション能力教育—OSCE を用いたインフォームド・コンセントの評価結果について—, 広歯学, 34, 102-106, 2002.
- 5) 田口則宏, 小川哲次, 森下真行, 富士谷盛興, 吉野 宏, 谷 亮治, 伊藤良明, 田地 豪, 玉本光弘, 渡邊峰朗, 海原康孝, 田口 明, 寶田 貫: 総合歯科医療研修における OSCE の標準化—研修前期, 中期, 後期における到達度の推移—. 日歯教誌, 18, 239-247, 2003.
- 6) 越野 寿, 川上智史, 平井敏博, 小西洋次, 石島勉, 有末 眞, 松田浩一: 共用試験歯学系 OSCE の妥当性と信頼性に関する検討—医療面接の課題から—, 日歯教誌, 18, 426-431, 2003.